「日本の民主主義の源流としてのクラーク精神」　藤田正一（北海道大学名誉教授）

2024 年 10 月 3 日に札幌時計台ホールで開催された「クラーク博士と音楽の夕べ」での講演の要旨をご紹介します。

《日本はいつから民主主義国家となったのか》

多くの日本人は敗戦後まで、民主主義の何たるかを知らなかった。

民主主義とは；リンカーンの「人民の、人民による、人民のための政治」であり、人民の政治：主権が人民にある（国民主権、主権在民）、人民が政治の当事者である。政策や法律などの決定権も人民にある。また、「人民による政治」とは政治の執行権は人民にあることであり、「人民のための政治」とは政治の目的は人民（の福祉）のためにあるということ。基本的人権、自由、平等、平等選挙、会議による多数決原理、三権分立、法治主義などがその属性である。

《日本の民主主義のルーツに関わる諸説》

以下の諸説は相互に排他的ではなく、影響しあって日本の民主主義を形成して行ったと考えられる。

1)「アメリカに教わった」説、2)大正デモクラシー説、3)「五箇条の御誓文」源流説、4)「日本に土着の民主主義があった」説、5)「福沢諭吉が紹介」説、6)フランス啓蒙思想の影響と自由民権運動源流説、7)新渡戸稲造源流説、8)新説・クラーク博士がもたらしたアメリカ民主主義源流説

《日本の民主主義発展の経緯のまとめ》

「日本には、飛鳥時代以来の律令国家としての法による統治や、聖徳太子の１７条憲法に説かれた、和を重んじ、争いを戒め、会議による決定、解決の重要性の強調や、武家政治の時代の家臣団による評定、どの時代にもあった地方村落の自治、入れ札の制度、そして、明治初年の五箇条御誓文にも見るような土着の民主主義「的」思想が既にあった。

そこに、明治初期に、クラーク博士がもたらした、ピューリタンに端を発し、アメリカ独立戦争、南北戦争を経て磨かれたアメリカ型民主主義が地球を西回りで、中江兆民らが紹介したフランス啓蒙思想とフランス革命を経て確立されたフランス型民主主義の流れが地球を東回りで日本に流入した。

土着の民主主義的思想の土壌に、アメリカとフランスから渡ってきた２種類の近代的民主主義思想の種が撒かれたと考えて良いだろう。

外来民主主義思想のうち、クラークによってもたらされたアメリカ型民主主義思想は、その種が蒔かれた地が札幌にあったこともあり、「人間を造る」教育による個人的な思想改革に寄与し、初期札幌農学校の錚々たる卒業生を輩出したが、政治運動とはならなかった。また、それを目指さなかった。

一方、政治的改革を目指した、中江兆民らフランス型民主主義の流れを汲むものたちと、板垣退助のような、日本の伝統精神から民主主義的思想に至った人々は自由民権運動を展開し、帝国憲法、帝国議会の実現に大きな役割を果たしたが、国民主権の真の民主主義の実現には至らなかった。

そして、大正期に、第一次世界大戦の勝利者側の民主主義の世界的拡張の流れ、人権意識の目覚めが、明治期に蒔かれた民主主義の種を育て、大正デモクラシーの時代を形成していった。ここでも、自由民権運動のように政治的改革から民主主義の実現を求めるアプローチの流れを汲む吉野作造らの運動と、クラークの民主主義の流れを汲む新渡戸稲造とその弟子の森本厚吉、有島武郎らの教育による、精神的改革から民主主義の実現を求めるアプローチがあった。大正期に花開くかに見えたそれら芽は、治安維持法に象徴される次の時代の軍国主義の抑圧によってさらに育つことが許されなかった。

敗戦後、軍国主義からの解放と、「日本国憲法」制定を含めた占領軍によるアメリカ民主主義の伝授によって、再び民主主義の芽は滋養を与えられ、育つことになった。この時、戦後民主主義の思想的リーダーとして活躍したのが、他ならぬクラーク博士の系譜に連なる人々、すなわち、札幌農学校 1 期生・大島正健の弟子の石橋湛山、2 期生・新渡戸稲造、内村鑑三の弟子の南原繁、矢内原忠雄、森戸辰男、丸山真男らであった。